



野口研所長 Kwadwo Koram 教授と拠点代表太田伸生教授



プロセメ学生達と太田拠点代表、野口研所長

東京医科歯科大学より、野口研コラム所長（Prof. Koram）に客員教授の称号が与えられることとなり、11月22日、太田拠点代表により証書が授与されました。先に到着し研究を開始しておりました本学プロセメ学生達も研究内容の報告などを致しました。今月号のニュースレターでは、その話題とともに、井戸先生のコンゴ民主共和国における研究活動報告、プロセメ学生のガーナ体験記をご紹介します。最後にガーナの食の話題も。お楽しみ下さい。（志村）

最近の研究活動から（ウイルス学）ーコンゴ民主の新興・再興感染症研究センター訪問記

筆者は基本的にガーナ国内を主なフィールドとして感染症研究を行っていますが、その状況を正確に把握するためにも、西アフリカ地域の周辺諸国は言うに及ばず、更にアフリカ大陸全体における感染症発生動向について常日頃から頭にインプットしておくことが必須となります。時には、幾つかの国々に実際に出かけて、自分の眼と足で、より詳細な情報を入手するようにも努めています。このNewsletterでも時折ご紹介したコンゴ民主共和国（旧ザイール）は、そうした国の一つであり、この12月中旬から下旬にかけて約10日余りをかけて同国を訪問して来ました。丁度その滞在中の12月20日に、同国で最高の教育機関とされているキンシャサ大学医学部内に新興・再興感染症研究センター（Centre de Recherche et d'Etude de Maladies Emergentes et Reemergents, 略称 CREMER）のOpening Ceremonyが催され、式に特別ゲストとして出席させて頂けるという機会に恵まれましたので、今回はそのことを記事にしてみたいと思います。

この国が感染症研究の上で何故に重要視されるのか。その理由は幾つかありますが、先ずはその地理的位置がアフリカ大陸のほぼ中央部の赤道直下にあって広大な面積（アフリカ大陸ではそれまで一番であったスーダンから南スーダンが分割独立したため、アルジェリアに次いで第2位）と約7,000万人と推定されている巨大な人口（ナイジェリアに次いで第2位）を有していること、そして国土の大半が熱帯雨林によって覆い尽くされており、高温多湿の気候が熱帯感染症の文字通り宝庫と成っていることなどです。同国の開発が歴史的・政治的理由から他のアフリカ諸国に比べ大幅に遅れた上に、長年に亘って同国が巻き込まれた戦争や紛争などが続き、極端なまでにイ

ンフラの整備が悪く、とりわけ保健医療行政が全国の隅々にまで行き届いていないことも感染症の蔓延に拍車を駆けています。



写真1
Steve Ahuka博士

我々のJ-GRIDの活動が、世界の新興・再興感染症に対する関心と連動して始動したことは皆様もよくご存知のことかと思いますが、先進国からの財政的援助が実質的に殆どない状況下にも拘わらず、現地の大学内に独自の力で研究センターが設立されたことは、まことにもって驚きと言わざるを得ません。新しいセンター長に任命されたのは同大学医学部助教授のSteve Ahuka博士(写真1)で、氏はキンシャサ大学医学部を卒業後、日本の長崎大学熱帯医学研究所における1年間の熱帯医学研修(修士コース)に参加、その後はフランスのモンペリエ大学大学院博士課程に進学し、レトロウイルス研究の分野では世界的に著名なEric Delaporte教授・Martine Peeters教授夫妻の研究室にてSIV/STLVの研究に従事。学位取得後もpostdoctoral fellowとして暫くフランスに留まり、先月11月より正式にキンシャサ大学の現ポストに就任したばかりの俊英でもあります。筆者はAhuka博士が長崎大学で研修中に知り合うこととなり、以来彼を通じてフランス南部に居を構えているDelaporte教授夫妻の研究室を訪問するなど

親密な交友関係が続いています。今回の研究センター設立の背景には、Ahuka博士という逸材に恵まれたことが第一。そしてセンター設立に蔭の立役者として奮尽努力された本Newsletter Vol. 14でもご紹介したことがある同国保健省国立生物医学研究所Jean Jacques Muyembe Tamfum所長(キンシャサ大学医学部微生物学教室の教授も兼任)(写真2)の力があつたことは言うまでもありません。同国ではエボラ出血熱やマールブルグ出血熱といったP4レベルの研究施設で取り扱うべき高病原性ウイルス感染症を始めとして、他にも致死性の高い感染症が頻繁に発生しています。研究室のセットアップは始まったばかりで、現段階では辛うじてP3レベルの実験が可能な簡単なグローブボックス式実験台が設置(予定)されただけの貧弱な設備ですが、超高度感染病原体に対する完全防護服も備えており(写真3)、やる気は大いにありという印象を受けました。しかも外国人として唯独り日本人である筆者がOpening Ceremonyに参列したことは、現地の他の教授陣やスタッフたちにも大いなるインパクトがあつたことを肌で感じました。筆者は、将来的に彼のチームと共同で様々な新興・再興感染症の共同研究を開始出来ることを今から夢見ています。(井戸)



写真2
新興・再興感染症研究センター(CREMER)の開設を宣言するJean Jacques Muyembe Tamfum教授



写真3
エボラ出血熱など超高度感染病原体から身を守る完全防護服を身に付けた研究センターのスタッフたち

最近の出来事からー

野口記念医学研究所Kwadwo Ansah Koram所長に東京医科歯科大学客員教授の称号を授与



写真1

野口記念医学研究所所長 Kwadwo Ansah Koram教授

ガーナ大学野口記念医学研究所の現所長Kwadwo Ansah Koram教授(写真1)は、前任のAlexander K. Nyarko教授の任期満了の後を受けて、2012年10月より同研究所副所長から昇格、野口研の所長に就任しました。以来、2013年1月に東京医科歯科大学で開催されたAsian-African Research Forum on Emerging and Reemerging Infections (AARF2013)[Newsletter Vol. 17を参照のこと]に特別招待者として本学に招かれたことなどを始めとして、当拠点活動をガーナ側から強く支えてくれる重要な人物の一人となっています。これまでのガーナ-日本間の科学技術協力に対する貢献を讃え、また今後の両国間の交流の絆をより一層深めることを祈念して、本年9月Koram所長に対し東京医科歯科大学より正式に客員教授の称号が授与されることに成りました。そして去る11月22日、ガーナ拠点研究代表者である本学国際環境寄生虫病学分野の太田教授が野口研を訪問した際にKoram所長に対して客員教授就任の証書が直々に手渡されました(写真2)。

この機会に簡単にKoram所長の略歴をご紹介しますと、氏は1982年にガーナ大学医学部をご卒業後、ガーナ国内の病院における医師としての勤務を経て、1988年に米国Tulane大学で熱帯医学の修士号を取得、1993年には英国ロンドン大学で疫学の博士号を取得されました。学位取得後は一貫して野口研に奉職されており、2000年に同研究所疫学部長、2009年より副所長を務められ、昨年2012年に所長に就任されています。ご専門は疫学で、特にガーナを含めた西アフリカ地域におけるマラリア対策における活動と研究業績が評価されています。この客員教授就任を機に、ほぼ半世紀に亘って築かれて来た日本-ガーナ間における医療協力の虹の架け橋が益々充実したものとなることを願って已みません。(井戸)



写真2

本学ガーナ拠点研究代表者太田伸生教授より客員教授の証書がKoram所長に手渡される。

12月上旬に、ガーナ北部のタマレや第二の都市クマシなどで行った、4泊5日のボウフラ採集フィールドワークの備忘録として…。



長崎大学、熱研の川田先生の下で、幹線道路の放置タイヤからなどボウフラ（特に、黄熱病やデング熱の媒介蚊であるヤブ蚊 *Aedes*）を採集し、一部は幼虫のまま殺虫剤試験を行い、残りは成虫にして殺虫剤試験と種の同定、標本作りをするのが僕のメインの研究テーマです。Exciting!!!

持ち味であるフットワークの軽さと泥臭さを発揮して、僕は熱研の川田先生（注：J-GRID 事業の中で長崎大と共同で進めているプロジェクトです）のご指導のもとで蚊採集のフィールドワークを存分に楽しむとともに、車で15時間以上の移動の末、サバンナの中に点々と存在する藁葺き屋根と土壁の丸い家の集落など、なかなか行くことが出来ないガーナ北部の数々の美しい姿を目の当たりにしました。そして、今回はさらにガーナ人の視線を味わうという貴重な経験ができました。

フィールドに出ている時間を除いて、ずっとガーナ人の Joe (Research Assistant) と Anthony (Driver) との3人で行動していたのですが、そこでディープに触れた彼らの生活。安いゲストハウス探し、拠点の運転手 Anthony との相部屋、ホスピタリティあふれる現地宿の朝食、採集で寄ったキンタンボ周辺の田舎の村での交流などなど。ガーナ人の中にひとり混じって過ごした時間は、ただの異文化体験に留まらず、むしろ不思議な安心感に包まれていてどこか懐かしく居心地の良いものでした。彼らの Akwaaba (アカン語で「おかえりなさい」) という無言の声が、今でも脳裏に聞こえてきます。(邑並)





プランテーション(上)とバナナ (下)

前号でプランテーションを紹介しましたので、プランテーションについて少し調べてみたところ、アフリカ、南米を中心とする熱帯地方の主食として、各国様々なプランテーション料理が存在することが分かりました。そこで、ガーナ発ニュースレターとしては、ここガーナで日常的に食されているプランテーション料理について取り上げてみたいと思います。バナナと似ていますが、バナナとの違いは、プランテーションは料理に用いられる果物だということで、揚げる・蒸す・茹でる・焼くといった調理法があり、実は主食として世界第 10 位を誇っているそうです。日本ではほとんど見ないので、知りませんでした。

さて、ガーナのプランテーション料理はだいたい下記のようなものになります。

揚げる

プランテーションチップス



ポテトチップスの様に、油で素揚げしたものです。黄色(写真左)と茶色(写真右)があり、黄色い方はほんのり塩味でビールに合いそうです。茶色い方は熟したものを揚げるせいか、甘いお菓子の様です。

ケレウェレ



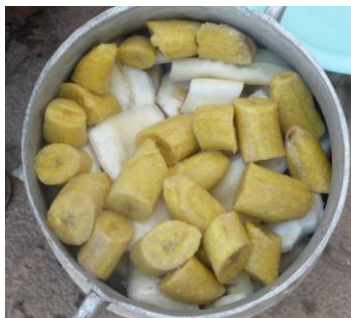
熟したプランテーションを香辛料で味付けして揚げます。通常ピーナッツと共に軽食として食べますが、スパイシーさがこれまたビールに合いそうです。

レッドレッド



本学学園祭で登場した、お豆と揚げたプランテーションの料理。辛いガーナ料理の中では比較的辛さが抑えられた料理です。

蒸す



随分以前にご紹介しましたが、「フーフー」です。大抵はキャッサバというお芋と蒸し、お餅のように滑らかになるまでつきます。代表的なガーナ料理です。各種スープと共に飲み込むように食べます。

茹でる



茹でたブランテーンは、各種ソースと共に食べます。トマトソースやなすのソースも美味しいのですが、コントンメというほうれん草に似た葉っぱで作るパラバソース(矢印)との相性は抜群です。

焼く



初めて食べたとき、石焼き芋を連想しました。大抵は路上の小さな屋台で炭火で焼いていて、炭火の香ばしさとホクホクした食感をあつあつのうちに食べるのがお勧めです。

いかがでしたでしょうか。実はこの記事で紹介した写真の何枚かはこれまでのニュースレターで登場したものです。すでに、ブランテーンについては折に触れお伝えしており、ガーナでは日常的に口にする食材のようでした。ガーナ料理はあまり変化のない伝統料理で、レパートリーが限られているように思っていたのですが、一つの食材が様々に姿を変え実はバリエーション豊であったことが分かりました。地方にはまだまだ私が知らない料理法がたくさんあるかも知れません。(志村)

編集後記

ここ野口研には、日本で学位を取られたガーナ人研究者が多くいらっしゃるため、日本語で声をかけられることも珍しくありません。太田先生の教え子（？）の研究者達も、先生がガーナにいらっしゃっていると知るや、挨拶に駆けつけて来ます。そんな環境の中、若いリサーチアシスタントも競って日本語を話そうとしている様子が最近多く見られます。大きな国際交流もこのような人と人との交流から始まるのだとそれを見て思います。拠点研究者の果たす役割も多岐に渡っているようです。

ニュースレターに関して、ご意見・ご要望などございましたら、下記までご連絡ください。

編集：志村 文責：井戸、鈴木 ご意見ご要望などの送り先：shimura.kyoten@gmail.com